

2012 年度

2012 年度にボランティア・NPO 活動センターがかかわった復興支援の取り組みについてまとめました。この年度は、「被災地でボランティア活動を行いたいと希望する学生がに対する支援金」に取り組み、教職員の有志が東日本大震災の復興支援活動に取り組む学生を応援するための仕組みを作りました。その他にも復興支援ボランティアバスの運行やフォーラム等を開催しました。主な事業の詳細について、事業ごとに時系列に紹介します。



■東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金募集■

実施日/場所	2012 年 6 月 11 日 (月) ~ 7 月 20 日 (金) 大宮・深草・瀬田キャンパス 【事務局：ボランティア・NPO 活動センター】
参加人数	教職員給与天引き：77 名、その他窓口での募金、校友会、親和会、文学部教授会（斯文会）

発災から 2 年目を迎え、被災地への関心の低下が問題視されていました。本学では、センターに被災地支援についての問い合わせ等が多数寄せられるなど、まだまだ関心の高さが感じられました。

本学では、学生による支援活動に対して大学として応分の援助を予算化していますが、本学の構成員である私たち一人ひとりが震災で犠牲になり被害を受けたすべての方々に思いを馳せ、寄り添いながら考え、行動するために、被災地でボランティア活動を行う学生・教職員を支援することを通して、支援する輪に加わる機会を作りたいと考え、「東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金」を募集しました。集まった資金は復興支援のボランティアバス運行や被災地での宿泊等、ボランティア・NPO 活動センター主催の復興支援ボランティアの際に学生への補助金にあてられることになりました。

協力の方法としては、①深草・瀬田キャンパスのセンターと大宮キャンパス文学部教務課のカウンターに募金箱の設置、②対象を本学教職員（専任教育職員（特任含む）・専任事務職員・嘱託職員）に絞って、2012 年 12 月、2013 年 6 月、2013 年 12 月の賞与引き落としの申込書と協力のお願い文書を配布し、協力を呼びかけました。申込みは 2012 年 7 月 20 日を締切として、

ボランティア・NPO 活動センターが受け付けの窓口となりました。受付期限は設けましたが、それ以降も随時受け付けています。

●募金箱に寄せられた支援金

¥447,623 円

●賞与引き落としでの支援金 (77 人)

¥3,095,000 円

(内訳) 2012 年 12 月期末手当

¥1,345,000 円

2013 年 6 月期末手当

¥800,000 円

2013 年 12 月期末手当

¥950,000 円

●親和会からの支援金

¥500,000 円

●校友会からの支援金

¥500,000 円

総合計 ¥4,542,623 円

(2013 年 3 月末現在)

★その他教職員からの支援金

2013 年文学部教授会（斯文会）からの支援金

¥500,000 円

2014 年文学部教授会（斯文会）からの支援金

¥300,000 円

2015 年文学部教授会（斯文会）からの支援金

¥300,000 円

教職員の反応

「学生のためになら・・・」「自分は行けないけれど、学生が活動をするのを側面的に応援したい」など、支援金を申込みの際に、多くのメッセージを教職員の皆さんからいただきました。

【教職員に配布した文書】

東日本大震災 被災地におけるボランティア活動に対する支援のお願い

(学生・教職員のみなさまへ)

東日本大震災発生以来、龍谷大学では、学生・教職員が様々な形で復旧・復興を支援する活動に取り組んできました。たとえば、本学が窓口となって5回実施した被災地におけるボランティア活動には約130人の学生・教職員が参加しました。瓦礫の撤去で汗を流したり、地場産業である硯の生産のお手伝いしたりするとともに、被災された方々からいろいろなお話をうかがうこともできました。参加した学生はこの経験を通して大きく成長しました。被災地を見る・聴く・感じることによって、メディアからの情報だけでは伝わらないことがたくさんあることを知り、自分自身の経験を通して物事を判断することを学びました。

復旧・復興の道は長く、険しいものになるでしょう。私たちは、被災地が抱える現実から目をそらすことなく、根源的な地点に立ち返って、持続可能な社会を実現するために継続的に努力してゆかなければなりません。真実を求め、真実に生き抜かれた親鸞聖人の精神は、激動し混迷を深めるこの現代において、私たちの生きる指針や拠り所となるものと確信しています。

継続的な支援活動として、2012年度には、東日本大震災復興支援報告会、被災地の人々との交流(予定)、東日本大震災復興支援フォーラム、東北の物品販売に加え、被災地におけるボランティア活動を2回計画しています。被災地からの「防災教育という観点で訪れて欲しい、被災地を見る・聴く・感じる事が大切」というご意見を受けとめ、昨年よりも一層被災地に寄り添ったボランティア活動になるよう準備を進めています。

本学の学生・教職員による支援活動に対して大学は応分の援助を予算化しております。さらに、本学の構成員である私たち一人ひとりが震災で犠牲になり被害を受けたすべての方々に思いを馳せ、寄り添いながら考え、そして行動することが大切だと思います。被災地でボランティア活動を行う学生に敬意を表し、支援することを通して私たちの思いを被災地に届けたいと思います。このような観点から、学生・教職員のみなさまにも被災地でボランティア活動をする学生を直接的に支援する輪に加わって頂くようお願いすることにいたしました。

つきましては、「東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金」を募集いたします。どうぞ、みなさまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2012(平成24)年6月
龍谷大学 学長 赤松 徹眞



■復興支援ボランティア活動報告会■

復興支援活動に龍大生はどう関わったのか？～被災地で活動した先輩から話を聞いてみよう！～

実施日/場所	深草キャンパス：2012年6月28日(木) 17時30分～19時00分/3号館101教室 瀬田キャンパス：2012年6月29日(金) 17時30分～19時30分/3号館107教室
参加人数	深草キャンパス：約60人、瀬田キャンパス：約60人、合計約120人

2011年度に実際に被災地へ出向いて活動した経験のある学生が、「どのような体験」をし、「何を想い」、「どんな人に出会ったのか？」などについて、自らが話し、未経験の学生に思いを直接伝える機会を作りました。

そして、その際に、センターのコーディネーターから『活動する上での注意点』『センターに来ているボランティア情報』『ボランティアバス』についての説明も行いました。

●6月28日(木) 深草キャンパス

発表者：足立 ころろさん(大学院経済学研究科)
震災直後から1年間の公益社団法人
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
で活動

発表者：高橋 亮太さん(経済学部4回生)
大学が主催した復興支援ボランティ
アバスで活動

司 会：竹田コーディネーター

●6月29日(金) 瀬田キャンパス

発表者：足立 ころろさん(大学院経済学研究科)
28日と同様のお話

発表者：鹽井 勁さん(国際文化学部2回生)
大学が主催した復興支援ボランティ

アバスで活動

司 会：東郷コーディネーター

参加学生の声

- ・テレビなどを通して被災地の映像や写真を見たが今回の話を聞いて、よりいっそう被災地へ行って自分の目で見て、肌で感じたと思った。
- ・被災地へ行くことだけが復興支援ではないと言ってもらえて安心しました。関西で何か自分に出来るボランティアをやってみたいと思いました。



■第1・2回 復興支援ボランティア■

実施日/場所	第1回：2012年9月13日(木)～16日(日) 3泊4日 宮城県石巻市 第2回：2012年11月16日(金)～11月19日(月)3泊4日 宮城県石巻市
参加人数	第1回：合計33名(学生30名/引率3名) 第2回：合計35名(学生30名/教員2名/職員3名)

震災から1年が経ち、今年度の活動を検討するために、4月に松島センター長と石川次長、竹田コーディネーターが石巻市を訪ねました。その結果、2011年度に活動した地域にはまだ

活動のニーズがあることがわかりました。そこで、今までに活動実績のあるところであれば、行く人は変わっても経験を積み重ねて行くことも出来るという判断から2012年度も引き続き

宮城県石巻市で復興支援ボランティアを実施することになりました。

昨年度のように緊急的な活動が求められなくなっていることから、『学生の学び』にも力点を置いた活動を設計することにしました。『見る・聴く・感じる』をテーマに活動プログラムを組み立て、参加者が自分に何ができるのか？を考え、被災地に関心を持ち続けることできるようなきっかけづくりをめざしました。

第1回は、石巻社会福祉協議会を訪問したり、地元大学生や仮設住宅の方との交流会を行いました。その他に、地場産業である硯石産業の支援の一環として硯石のスレート磨きを実施しました。また、旧石巻市雄勝総合支所、旧市立病院、大川小学校跡地を訪問しました。

第2回では、石巻市雄勝で、仮設商店街「おがつ店こ屋街」の1周年記念イベントへ参加しました。地元の要望を受け、京都の企業にご協賛いただいた品々で京都を前面に出したブースを演出しました。(京都の名産品販売、和風喫茶、匂い袋製作体験、お楽しみ輪投げの4つのコーナーを実施) また、地場産業である硯石産業の支援活動の一環として、硯石のスレートを磨く作業を行いました。第1回と同様、旧石巻市雄勝総合支所、旧市立病院、大川小学校跡地の訪問や、地域の方からお話を伺わせて頂くなどのプログラムも実施しました。

参加者募集にあたっては学生・教職員に対し深草・瀬田・大宮の全キャンパスでコーディネーターが募集説明会を実施し、活動趣旨・リスクを十分に理解した上で参加するように呼びかけました。説明会への参加者は全キャンパスで120名でした。個別に応募したいと来室する学生もいましたが、キャンセル待ちの学生も多数いることから、そういった学生には、次回への応募を促しました。

※提出物：参加申込書、活動誓約書・保証人同意書

※参加費：2万円(食費、宿泊費、保険代込)

ご協賛いただいた企業一覧と品物(五十音順)

株式会社 一保堂茶舗	京銘茶(ほうじ茶)
株式会社 井筒法衣店	京の念珠(腕輪念珠等)
株式会社 井筒八ツ橋	京菓子(八ツ橋)
今西製菓 株式会社	京菓子(飴)
株式会社 くらちく	京の土産物(和雑貨等)
株式会社 松栄堂	京の香り(お香、匂い袋)
京つけもの 西利	京漬物(おつけもの)
株式会社 長谷川松寿堂	京和紙(折紙)
株式会社 美好園	龍大オリジナル宇治茶「雫」

●第1回スケジュール

9/13 移動

9/14 石巻市社会福祉協議会を訪問
石巻専修大学の山崎ゼミと交流会
大川小学校跡地を訪問
ふりかえり

9/15 硯石磨きの作業(地場産業の復興支援)
旧雄勝町庁舎の中を案内していただく
雄勝森林公園内にある仮設住宅の皆さんとバーベキュー交流会
バスの中でふりかえり

9/16 京都駅と深草キャンパスにて解散



●第2回スケジュール

11/16 移動

11/17 地元の方からお話しを伺う
ふりかえり

11/18 希望者10名がホタテ養殖の漁業支援活動
大川小学校跡地を訪問
旧石巻市雄勝総合支所内を見学

おがつ店こ屋街で1周年記念イベント
に参加

硯石磨きの作業

11/19 京都駅と深草キャンパスにて解散



第1回参加学生の声

- ・今回このボランティアに参加し、たくさんの複雑な思いがわいてきました。その中でも大川小学校では津波の恐ろしさ、命の儚さを感じました。それと同時に、最後まで先生や、生徒たちは、必死に生きようとしたんだろうなと思って、胸があつくなりました。子どもたちの夢の跡となった校舎に自分は立って、これからの人生、必死に生きぬかないと失礼だなと感じました。
- ・僕は今回のボランティアに参加して被災地をこの目で見て今日に至るまでの自分の生活ぶりにただただ憤りを覚えました。下らないことにお金を使うし、食事は平気で残すし、親しい友人にあいさつ感覚で「死ね」などと言うし、いわれても何とも思わないし、世界中の“どうしても生きていたかった人たち”一人一人に謝りたい気持ちでいっぱいになりました。震災からこれほどの時間が経過してやっと僕はたったこれだけのことに気づきました。ようやく僕は「ヒト」から「人」になることができました。
- ・大川小学校では津波の傷が生々しく残っていて、幼い命が、思い出が、未来が、一瞬にして失われたのだと思うと、無念さとか、悲しさなどの想いがこみあげてきました。そこで出会ったおじさんに「教師になるなら生徒の命だけは守ってくれ」と言われ、教師という職業の、責任の重さを感じたのと同時に、ずっと心に留めて守っていこうと決意しました。

第2回参加学生の声

- ・実際に現地に行って、自分の目で見たり、お話を聴いたり、いろいろなことを感じる事ができたのは、自分にとって貴重な体験だった。まだ、行っていない人は、ぜひ現地に行って体験してほしい。
- ・3泊4日の活動の中で一番印象に残っているのは、復興祭で「御神輿」に参加させてもらったこと！街の復興の象徴である御神輿と一緒に担がせていただいたことで、現地の人とつながっているように感じられて、とても嬉しかった。
- ・私たちにできることは、まだまだあるんだと感じました。これからも、自分にできることを探して、行動したいです！



■復興支援フォーラム■

『震災は他人事（ひとごと）じゃない！東北沿岸 600 キロの震災報告』～つながり続けるということ～

実施日／場所	2012年12月1日（土）13：30～16：30 22号館101教室（深草） ※写真展：12月1日（土）10：00～17：00 22号館107教室（深草）
参加人数	フォーラム、写真展共に約200名

震災から1年以上経ち、震災に関する報道が減っていく中、被災地の現状が関西からは見えにくくなってきました。しかし、東日本大震災で深刻な被害を受けた地域の復興は、まだまだ進んでいません。私達には、その現状に目を背けることなく、一緒に復興に向けて歩み続けることが求められています。そのため、被災地域を幅広く取材されている写真家の大西暢夫氏を講師としてお迎えし、発災直後から現在までに取材した被災地の状況をお話していただき、被災地に関心を持ち続けるためのきっかけにするためにこのフォーラムを企画しました。

●講師：大西 暢夫 氏（写真家）

●スケジュール

①開会の挨拶 池田副学長より

②学生からの復興支援活動の報告

司会者（学生2名：深草・瀬田キャンパスの学生スタッフ代表）より、簡単に今までの大学として復興支援の取り組みについて説明。

※会場内及び、会場周辺には今までの活動展示を行った。

③大西 暢夫 氏からの講演

発災直後から現在まで、取材を通して見てきた被災地の姿について、写真を見せながら、その時のエピソードを交えながらの講演

④『東北沿岸 600 キロ震災報告』、『3.11 の証言～心に留める東日本大震災』の販売及び、雄勝物産品販売。

⑤質疑応答

⑥閉会の挨拶

★同日に 22 号館 107 教室にて、大西暢夫写真展も同時開催。

参加者の声

- ・被災地で見て感じた気持ちになりました。しばらく時間が経って今の大学生活にまた戻ってしまっていた自分が恥ずかしくなりました。この気持ちを忘れずに人に「伝えること」を中心に自分なりの方法でしていきたいです。（学生）
- ・「死んだ人を放っておいても生きる人のチカラを大切にする」というお話が、一番衝撃でした。3.11 発生当時のもどかしいつらい気持ちを思い出しました。そしてこの気持ちこそ、忘れてはならない、伝えるべき事柄だと強く再確認しました。（学生）
- ・震災から1年半以上が経ち、私の中で震災への思いが少しずつ薄れていっている中で今日のお話をお聞きして決して風化させてはいけないと改めて感じました。（学生）
- ・私は神戸出身で阪神・淡路大震災で被災しましたが、幸い私の周りの被害の状況は少なく私自身の記憶も断片的にしか残っていません。自分たちの記録を残してほしいという思いを受け取り、活動されている大西さんに感銘を受けました。（一般）



